

○木林 美由紀¹⁾、鄭 賢姿²⁾¹⁾ 静岡県立大学短期大学部²⁾ 大邱保健大学

【背景および目的】研究代表者は、先行研究¹⁾でアジアにおける咀嚼力と食行動との関連性についての基礎的調査として、日韓の大学生を対象に生活・食行動および摂食時における噛む意識等の自記式質問紙調査を実施し、日本の学生は、幼少期から噛むことの指導を保護者から受けていたが、噛む意識は韓国の学生に比べ低く、健康に対する意識も韓国の学生の方が高い結果を得た。そこで、日韓の学生を対象に咀嚼力の調査を行い、その比較と生活行動および食行動との関連性について検討を行った。

【方法】日韓の保健系大学の学生249名(日本:女性 112名、20.5±1.3歳、韓国:女性 137名、19.8±1.0歳)を対象とした。咀嚼力は、間接的咀嚼力の評価として、GC社製の咬合力感圧フィルムデンタルプレスケール[®]50HタイプRを用い、採取後は、直ちに専用の遮光器に保管し、常温輸送後、1週間以内にオクルーザーFDP705にて咬合面積(Area)、平均咬合圧(Ave)、最大咬合圧(Max)、咬合力(Force)を解析した。直接的咀嚼力の評価は、(株)ロッテ社製キシリトール100%ガムを40秒間自由咀嚼した際、溶出する糖量の割合(溶出糖量)を測定した。日常の生活行動および食行動は、森本の生活習慣指数²⁾を参考に、咀嚼意識、摂食状況、食への期待度、自覚的ストレス、健康意識、摂食時の噛む意識および幼少期における保護者の噛むことへの指導等を含む40項目とし、自記式質問紙表を用いて実施した。統計処

理は、統計ソフト(SPSS ver14.0J)を用い、有意水準は5%以下とした。

【結果】日本人の溶出糖量は63.2±5.3%、Areaは13.8±8.1mm²、Maxは112.4±18.7Mpa、Aveは45.0±6.8Mpa、Forceは605.1±317.4N、韓国人の溶出糖量は58.7±7.5%、Areaは12.4±10.5mm²、Maxは108.5±16.1Mpa、Aveは43.4±7.6Mpa、Forceは488.2±360.0Nで、溶出糖量およびForceは日本人のほうが有意に高値を示した。また、幼少期に保護者からよく噛むように言われた者(N=31)は、言われたことがない者(N=113)に比べ5%の危険率で溶出糖量が高値を示した。

【結論】日本人のほうが韓国人に比べ直接的咀嚼力が有意に高く、咬合力も高値であった。保護者の幼少期の児への噛むことの指導が、咀嚼力の育成には有効であると明らかになった。

【参考文献】

¹⁾木林 美由紀、鄭 賢姿(2010) 日本・韓国の大学生の生活行動および食行動の比較、*JJHEP*,18,46

²⁾ Kusaka Y *et al.* (1992) Healthy lifestyles are associated with higher natural killer cell activity. *Prev Med*, 21, 602-615.

(連絡先)

木林 美由紀
422-8021 静岡市駿河区小鹿 2-2-1
静岡県立大学短期大学部 歯科衛生学科
E-mail: kibamiyu@u-shizuoka-ken.ac.jp